

## 大学における社会人教育について ～「木工セミナー」の実践を通して～

山本 和史(岡山大学教育学部)

生涯教育の体制は発展途上と言って良いが、その中のものづくり教育について考察した。特に木工分野は学習の機会が少なく、内容的にも問題を感じている。今年、実践した社会人木工セミナーを例に学習者の構成と意識、求められる支援内容などを検証した。結果、体系的でかつ継続的な学習支援の必要性和、それを前提とした題材、また同時に結果だけを求める学習者の意識的な問題が明らかになった。この講座の設定方法を巡って問題を感じたため、大学における社会人教育の窓口について考察を行った。文部省生涯学習審議会はその拡充を求めており、特に公開講座を授業科目内で行うことは有効である。これに半歩踏み出したかたちで木工講座の具体案を提案した。

キーワード：社会人教育，生涯教育，木工講座，公開講座

### I. はじめに

生涯教育に対する社会的ニーズは潜在的な部分も含め、今後増大し続けると考えて良い。合い言葉「だれでも・いつでも・どこでも」を支えるべく各方面で学習機会の拡充が努力されているが、質・量とも発展途上と言わざるを得ない。むしろ常に増殖又は変化し続ける性格のものと考えらるべきであろう。従ってカルチャースクール的なものは無秩序な広がりを見せている。

しかし社会教育施設におけるそれは明らかな骨格を示して学習援助する必要がある。しかし立場上その合い言葉に縛られる面も避けられず、広く浅い窓口の拡大に終始せざるを得ない。ネットワークも多様な広がりを見せてはいるが、果たして骨格がつかっているかどうか疑問である。学習者は幹から枝までは案内されても、先には道のない平原が広がっている状況とは言えまいか。これに対し大学は何ができるか、枝先に五色の葉を散りばめる時代ではない。専門性を生かし、どう体系的学習の支援を行うべきか、社会に対して回答を迫られていることを認識すべきである。

### II. 生涯教育におけるものづくり

岡山生涯教育センターの意識調査(1998)によ

れば、今後してみたい学習活動について「生活に役立つ技能」40%、「趣味やお稽古ごと」39%、「職業上必要な知識や技術」30%が上位にある。またその目的や動機については年齢や学習経験により順位は異なるが、「働くほかに生きがいを持つため」「教養や趣味を深めるため」「体力作りや健康管理のため」などが上位を占める<sup>※1</sup>。

その中でも「ものづくり」は受講者にとって特に魅力的なキーワードであり、どの体験学習施設でも外すことのできない講座となっている。対象は何であれものを作るという行為自体に人を夢中にさせる力がある。それが人間形成にとっても重要な活動であるにも関わらず、生活や教育、そして社会システムの中で置き忘れられているように思う。こうした講座への高いニーズはその裏返しではなかろうか。

今回含め幾度かの木工講習会等で接した受講者は、総じて非常に熱心であった。好きな人が集まっているわけだから当たり前とも言えるが、食欲なまでの制作意欲に何か本能的な欲求、すなわち欠けているものを補おうとする衝動に駆られている様にさえ感じたのである。

また学習の場において、まずものに出会い、自らそれを作る体験をする、そして関係事象を調べ進むことはあらゆる分野において有効な教育手法であ

り、その逆順もまた効果的である。現に学校教育の総合的学習などでは常套手段とも言えるのではないか。このことはものを作る行為がいかに人の意欲を引き出し、意識を集中させる効果があるかを示すものである。同時にものづくりが総合的な知識と能力を必要とし、またそれを養う重要な学習であることを証明している。さらにものには文化が集約されていると言っても過言ではない。従って生涯教育としての視点からものづくり教育を見直し、より充実した環境づくりが必要である。

しかし生涯教育関係施設において十分な作業スペースと、適切な設備及び専門員を備えた例は残念ながらほとんど無い。このため工芸分野はその一翼を担っているながらも、生涯教育という視点では受講者の需要に応えきれない場面も多い。

各地の生涯教育施設における構想にものづくりに関する学習支援が挙げられている例は多い、しかし施設を図面上から判断しただけでもそれが机上の計画であると見て取れるのである、この部分の検証は機会を別にする。しかし教育体制とは無縁に施設計画が進むという縦割り行政の弊害を最も受けやすいのがこの分野であると明言しておきたい。

これは造形教育に携わる者として根本的な挫折感であり、ものづくりに対する認識不足は根深いと感じざるを得ない。なぜなら竹とんぼも建築も“ものづくりのプロセス”は共通であり、その概念の社会的欠如を証明しているに他ならないからである。

中でも木工分野は特に理解を得られにくい分野であるようだ。包含される範囲が広いため、目指す方向によって必要とする設備・備品の構成は異なる。当然方向性を持って計画がなされるはずだが、基本的な汎用機すら備えられず、備品構成もちぐはぐでは講座そのものが成立しない。従って多くの講座は既成の小箱等へ表面加飾（トール・インテイク、彫刻等）をするに留まるか、組み立てキット、あるいは「親子木工教室」と称した図画工作的題材に終始せざるを得ない。さらに半日～1日の設定であればなおさらである。このような内容も対象者によっては必要であるが、木工分野の隅をつつく様なものであり、冒頭で述べた骨格を持った教育体制とはほど遠いのである。学習者にすれば狭小な単発講座の受講はできるが、主体的にものづくりを楽しむ、あるいは継続的に学習する場はそこに保証されていない。従って学習者は表層をさまよわざるを得ず、結果的に講座へ参加する者の意識にも影響を与える。

日本は歴史的にも優れた木工文化を持つためか「木は専門家でなければ扱えない」「手を出さない方がよい」との特化した観念を持つ人も少なくない。自分で住宅を建てる、あるいは内装をやり変えるなど他の先進国では決して珍しいことではないが、日本では社会構造自体がそれを拒む部分さえある。

また学校教育の場においても教師の経験不足と”木工＝刃物＝危険”との図式から、木材を扱う内容は敬遠されがちである。小・中学校の工作や美術、技術家庭科の重要な題材であるにも関わらず、残念なことに「全くの未経験」と答える大学生に多く出逢う。

本来、木材は人にとって等身大の素材であり、乱暴に言えば誰にでも何とかなる許容力の大きな素材である。反面、筆者自身生涯をかけても学び尽くせない無限の深みと広がりがある。木でものを作る行為は学習成果がたちを持って自覚されるため達成感を得やすい、と共に次のステップも明確に感じられるため意欲が尽きることはない。

昨今、郊外型のホームセンターなどが充実し、家庭用電動工具や素材も容易に入手できると同時に多少の加工サービスを受けられるようになった。また、いわゆる日曜大工の作例を主とした How to 本やセミプロ以上を意識した内容のものまで書籍も多種出版されており、ガーデニング・ブームの煽りもあってか園芸台や本棚などを自作する人は増えてきた。さらに一部の工務店では建築端材を利用した木工教室が継続して開催され、毎回参加者も多く盛況と聞く<sup>2)</sup>。近年、情報の Web 化が進み地域的情報のみならず海外の情報や用具もインターネットで得られるためソフト面での充実は加速傾向にある。このような状況のもとに個人的な楽しみに留まらずグループで作品展を開催し、さらにその作品の販売を行う例までである。また家具作家として独立を目指す若者が増えているなど、木工人口の裾野は広がると同時に次段階へと展開しつつあると感じている。

これに対し材木店、刃物店、電動工具メーカーなどは今までの業界内市場から一般個人に目を移し、新たな市場と捉えて販売や指導サービスなどの展開を始めている。しかし、教育機関においてこれらセミプロと呼ばれる中域層を支える体制は存在しない。独立を目指す人は高等技術専門校などで学習を積み直すことが可能だが、生涯学習者は全く性質が別である。岡山県内の木工設備を持つ教育機関<sup>3)</sup>でこれに対応している例は数日間の公開講座に留ま

る。従って体系的な指導を受ける機会は無く、知識・技術も乏しいまま制作されている場合が多いことは当然であり、教育機関の支援が必要である。

今回、ある社会人グループが当学部木工実習室を会場にセミナーを開催した。この実践を元に社会人を対象とした講座のあり方を検証したいと思う。

### Ⅲ. 木工セミナーについて

この木工セミナーは「インテリア製品のデザイン試作技術セミナー」との名称でインテリアコーディネーターズクラブ岡山が開催した研修講座の1つである（これに至る詳細は後に述べる）。開催期間は本年度8月から9月の平日8日間（48時間）、参加者は女性9名であった。合計18作品を仕上げるなど、彼女らの制作意欲と研究心は旺盛で学生の比ではない。自分が満足できるものを作りたい、お互いにその達成感を共有し、さらに次の制作欲求へと熱気に満ちた講習会であった。まず講座の設定段階から紹介したい。

#### 1) 講座設定について

今回参加したグループは、以前からポリテクカレッジ岡山が行っていた公開講座でインテリア作品製作の研修を重ね、現在でも別のかたちでそれを継続している。しかし本年度ポリテクカレッジが再編されたため講座担当学科を失い、その担当教官より私（筆者）に講座引継の依頼があった。しかし筆者も対象者もお互いに“何ができるか”という予測が立たない。従ってお互いのケーススタディとして、本務に無理のない長期休業中の8～10日間を当てることとし、講座の設定方法を検討した。

一般市民が国立大学において生涯学習に取り組むには、正規の入学（社会人特別選抜）以外に科目等履修生となるか公開講座に参加する、あるいは自ら施設の借用をするほか現時点では無い。今回の場合、科目等履修生では目的が異なり、公開講座が最も性格に近いが講座を新設する必要がある。しかし公開講座の受講者は公募であり、団体の指定や優先は適切でない。同時に木工の性格上、技術的な演習と制作、それに要する時間（期間）を無視することはできない。従って従来、本学部で行われている講義を中心とした講座構成へ組み込むことは困難である。また8日間（6h × 8 = 48h）を公開講座として実施した場合、受講料は一個人13,500円である。

一方、施設借用の場合同様の日程で約1万円と試算されたため、今回の講座は参加者の経済的負担を

表 1

岡山大学国有財産臨時使用に要した費用	
場所	教育学部東棟、木工実習室
面積	139.2㎡
使用時間	8日、117時間※
費用	7,909円
※使用時や連日使用の有無などにより別規定がある。	
教育学部施設使用に伴う光熱水料	
延べ人数	58名
延べ時間	48時間（6h × 8day）
費用	1,849円
※電力、水道それぞれ算式がある。	

優先しこちらの方法を選択した。しかし個人的なグループでは申請できないため、便宜上このグループの元組織であるインテリアコーディネーターズクラブの主催講座として手続きを行った。このクラブの活動趣旨は「デザイン技術の向上と自己研鑽や親睦を通して地域へ貢献する」、とのことから活動の目的は製品（商品）開発ではなく会員の生涯学習と捉え、国立大学が場を提供することに問題はないと判断された。10名程度の参加予定であったため会場に要する費用は一人あたり約千円の負担である。（借用に要した経費について表1を参照されたい）公開講座の受講費用で十分各自が材料を用意することが可能である。しかし生涯学習としての視点から幾つかの問題点と課題が浮き上がった。

まず講座の主体性が大学ではなくグループにあり、大学側の生涯教育活動とは言い切れないこと。そして借用にあたって一個人では難しく、また営利目的の団体では借用できない。団体であれば逆に非営利団体であることを証明する必要がある。同時に講師（筆者）の依頼と、講師は兼業の許可が必要である。これらの手続きは使用者に対してフォーマットが示されておらず、幾度も事務担当者とのやり取りが必要であり、誰もが気軽に借用できるわけではないこと。またこの計算には講師謝礼金が含まれていない。参加人数が9名にとどまったため、トータルの個人経費を見ると公開講座との差は結果的にあまり出ていないという反省点もある。今回は様々な手続きを通してお互いに理解し合っているが、いくら兼業許可を取っていようと一般市民から見れば公務員に対する謝礼というまた別の問題も含んでいるように感じた。

しかし社会人が自ら学習の機会を設置したことで、意欲とそれにつながる成果も公開講座で行う以上に大きいものになったと思うし、その場を大学が提供したという部分は評価されて良い。今後このような講座を継続して行い、実践をもとに相応しい講座

形態と内容、指導法を検討することが急務であると実感した。

島根大においては公開講座で経験を積んだ参加者が他者の援助を行うなど、学習者同士のサポート体制や地域の輪が生まれており、今回のセミナーがその第一歩となることを期待している。

## 2) セミナーの内容と実際

参加者9名がそれぞれに制作物が異なると聞いていたため、材木はすべて持ち込みとした。日程は8/29.30、9/5.6.12.13.19.26の8日間で、各日午前9:00～午後4:00（昼休憩1時間）の6時間を当てたが意欲に押されて時間を超過することも多かった。

初日、各人の制作計画と意図、素材を確認。スケッチや寸法、製作方法が不明確と判断できたので各人ごと相談しながら筆者がスケッチや寸法を描き起こし、制作計画を提案した。彼らは他校で実習を繰り返しているので改めて指導は必要ないだろうと判断してその後は加工作業に入った。

しかし工具及び加工機械の操作に不安を感じたため、幾度か作業を止めて演習を行う必要があった。「思っていたものがとりあえず形になりさえすれば良い」といった考え方で素材特性や構造的強度、安全な加工方法など不具合なまま制作を繰り返して来たことが感じられた。その経験がせつかくの断片的知識を現実から隔離してしまい、学習の深まりを逆に阻害している様であった。従って作業を進めながらそれぞれのケースを取り上げ、基礎から指導を繰り返す必要があった。セミナーを通しての指導内容を以下に箇条で示す、加工内容・工程が不揃いのため順不同である。

- ・ 作品イメージに対するデザインの助言
- ・ 木材の種類による質感、強度の違い。
- ・ 木表、木裏、木理と収縮・変形について。
- ・ ジグソー、トリマーの使用法。
- ・ 丸鋸盤、鉋盤の安全操作。
- ・ 丸鋸盤と角のみ盤によるホゾ加工。
- ・ 木工旋盤の使用と、丸ホゾの加工。
- ・ ラジアルボール盤による傾斜穴あけ加工。
- ・ 通しホゾとクサビを使用した接合。
- ・ ビス（内装用）による板材の接合。
- ・ ビスケットジョイントによる板材の接合。
- ・ 四方反り台ガンナ、ウッドカーバー、ホイールサンダーによる表面仕上げ加工。
- ・ 帯鋸による板の挽き割り、と、曲線挽き。
- ・ 雇いざねによるはぎ合わせ。
- ・ 柿渋、漆、松煙、ペンガラによる仕上げ法。
- ・ 一液ウレタンと砥の粉によるアンティーク仕上

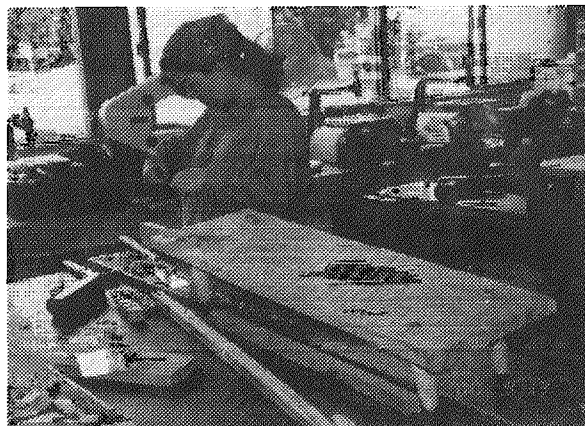


図1. セミナー風景



図2. 作品と参加者

げ法。

・ 真鍮板による金具・蝶番加工の見学 など  
以上の製作作業の結果、大小の差はあるが一人1～3作品、次に示す計18作品を仕上げた。

作品	・ 花台／飾り台類	——	8点
	・ ローテーブル	——	1点
	・ 椅子類	——	7点
	・ 鏡付き本箱	——	1点
	・ ヒーターカバー	——	1点

当初一人一品の予定で制作を進めていたが、組み立てまで進むとすぐ次の材料を調達して次作品の制作を始めるなど、指導上の作業把握ができないため制作数を抑制する必要さえあった。また漆を使用した作品があったため、その本人含め4名が腕や全身にかぶれを起こした。私の配慮不足を反省しているが、それを気にも止めず制作を続けた態度には感服した。最終日は、アンケートと反省会を行い作品の撮影をして閉会した。

私はこのセミナーを通して社会人教育の難しさを改めて実感することとなった。それは、誤解している人と自覚した人の双方が、あるいは一個人の中に

その両面が入り交じっている点である。

誤解とは結果だけを求め、またそれを得続けられた（個人的な満足の範疇であるが）ために「指導さえあれば何でも作れる」という大きな勘違いを指している。また自覚とは体系的な学習の必要性に気づき、自らの学習段階を意識していることを指している。

高坂健次他は著書<sup>24</sup>の中で「知識のヒエラルキー」について強く述べているが、木工とはまさに知識と技能を経験で結びつける学習である。様々な表情と条件の木材に対し、自分の意図を照らし合わせてフォルムや構造、道具、加工法、塗装、納まり、質感その他を構築する。同時にそれぞれが自分の技術的限界の上で相互に関係し合っており、刃物一つ欠けてもできない表現がある。彼らはそれが限界とは気付かないまま、それぞれの限界点だけを繋ぎ合わせようとする傾向があった。

しかしその世界に興味があればあるほど多くの作品や情報に触れ、目が肥えるのは当然である。自分の制作しようとするものにも段階と階層の意識を飛び越えて「結果」のイメージが先行しやすい。そこへ職業教育的な教育パターンをそのまま実施したのでは意欲的な学習の芽を折ることになりかねないだろう。そのため一般のものづくり講座では参加者の意向に添った、すなわち途中は省いて「見栄えの良い結果」さえ仕上がれば良いという学習パターンに陥りやすい。これは生涯学習としての学習内容を構築できないばかりか、よりこの姿勢を助長する指導になる。一定の限界を示すと共に「大人の作品」として満足感を得られる題材設定と、段階を踏みつつ学習が深まるよう計画的な指導が大切である。

#### IV. 受講者の意識と考察

今回のセミナー参加者全員にアンケートを実施し

1; 今後、社会人セミナーのあり方を検討するためアンケートにお答え下さい

(注; >\*は回答人数を示す、実施人数9名)

① 性別 女性 >9/9

② 年齢構成 30歳代 >1、40歳代 >4、50歳代 >4

③ 従業状況と時間 家事のみ >3、フルタイム(週5日) >1  
委託業務; 週2~3日 >1、週3~4 >1、不定期 >3

④ 現在参加している他講習会・セミナー・教室はありますか、講座や内容をお答え下さい。

・福山パティカレッジ〈家具デザインセミナー〉	>1	・水泳	>1	・草木染め	>2
・和気町〈民芸がら後継者養成コース〉	>1	・気功	>1	・カラー	>1
・透明館〈ガラス教室〉	>1	・英会話	>1	・陶芸教室	>2
・アートフラワーアレンジ	>2	・料理	>1	・水泳	>1

⑤ 今まで参加した、もの作りに関連した講習会・セミナー・教室の種類は?

講座数	1~3講座	6名	4~6講座	2名	10講座以上	1名
種類	陶磁	染織	木材	ガラス	その他	
回数	1回>3 2回>1 3回>1 5回>1	2回>1	1回>1 2回>1 3回>2 3年	1年程度>2	創作人形2年>1 パッチワーク >1 アロチ >1 洋裁 >1 手作りの会 >1	
内容	備前焼他	草木染め 裂き織り	講演、ミチュア制作 家具、木彫	吹きガラス		

⑥ 今までに参加したもの作り以外の講習会(セミナー)はどのようなものですか。見学・観賞含む

> 建築・インテリア関連 照明、インテリアパース、インテリアコーディネート、カラーコーディネート

> 芸術関連(美術・音楽など) 絵手紙

> スポーツ 岡山スポーツ教室、アロチ、水泳、気功

> 資格取得関連 インテリアコーディネーター資格取得用、造園、福祉住環境、洋裁、生花

> 他の趣味 英会話、スペイン語、パソコン

> その他 清心女子大〈美しく老いる〉、環境〈ケナフについて〉、家事家計

⑦ 1ヶ月にどの程度の時間を講習会(セミナー)に当てていますか、答えやすい欄に記入下さい。

・月に 3~4日 >1、 5~6日 >2、 7日前後 >1、 8~12日 >2

・毎週 5~6時間 >2名、 隔週 5~6時間 >1

⑧ 1つの講習会(セミナー)にどの程度までなら経費(材料等含む)をかけられますか?。

・5,000円~10,000円 >3名、 20,000円 >6名

⑨ 今回のセミナーへの参加動機は... ?

自分から進んで >7、 友達に誘われて >2、 場所的に便利だから >3

⑩ 今後どのような講習会(セミナー)へ参加したいですか、分野や内容についてご希望をお答え下さい。(複数可)

・金具作り、蝶番 >5、 絵画 >1、 もの作り~文化的内容 >1

・ステンドグラス >1、 陶芸 >2、 作家の工房見学 >1

・塗装方法や木材の性質などに詳しい内容 >1名

⑪ 生涯学習として今後取り組んでみたいテーマがありますか?。

・社会貢献、 栄養学、 色と素材

図3. アンケート結果; 問1

た。わずか9の標本であるが、彼女らは他の木工講座の受講経験もあり、多くのものづくりに関する講座に参加していることから良い指標になると判断した。目的はまずどの様な人が参加しているかを把握することと、今後の講座のあり方を検討するためである。以下にその結果を示しながら考察を加えたい。

### 1) グループの構成と要素

質問Ⅰ-①②③(図3)の回答から今回の参加者は家事と並行したかたちで委託業務のインテリアコーディネートを行うという就業場所と時間をあまり縛られないグループであることが分かる。比較的新しい職種であるため60歳代は見られないが、余暇時間との関係で40～50歳代が中心になってい

#### Ⅱ 木工セミナーについて

(注；>\*は回答人数を示す、実施人数9名)

##### ①木工はいつ頃からされていますか？

約1年>2, 2年>2, 3年>3, 5年>2

##### ②そのきっかけは？

- ・ポリカレッジ(岡山)での講演会、実習に参加して
- ・以前から興味があったので退職を機会に始めた
- ・友人に誘われて、知人から聞いて、恩師の紹介で
- ・ユ・テ・イ・タ・ス・クラブの活動から
- ・自分の感性にあった作品を求めて
- ・手作り家具を見て

##### ③木工作品は今までに何点制作した(制作中含む)経験がありますか？

3点>2, 5点>1, 6点>1, 7点>1, 9点>1, 20点>2, 大6・小多数>1

##### ④今回の講座で経験or修得or達成したいと思っていた内容があればお答え下さい。複数可

- ・素材について >3
- ・加工方法や工具について >9
- ・家具構造について >4
- ・仕上げ方法について >8
- ・木の種類に適した加工方法

##### ⑤充実or達成感は得られましたか？

期待以上>9, 期待通り/まあまあ/少々物足りない所もある/物足りない>0

##### ⑥良かった部分、得られた内容についてお答え下さい。

- ・初めての機械工具を使うことができた。
- ・効率的で早く作品ができた。
- ・思った以上に勉強することがあった。
- ・指導者の情熱が伝わって意欲的に受講できた。
- ・無理だと思っていたことにも挑戦し作品を上げることができた。
- ・説明が良く、良理解して実習することができた。

##### ⑦物足りない、不満、残念な部分についてお答え下さい。

- ・あと一日欲しかった。
- ・欲張りだが、金具の制作もしたかった。
- ・漆にかぶれたのは残念、いつものことだが。

##### ⑧今回同様のセミナーがクラブ以外で開催された場合参加しますか？

はい>7, 時期と内容によって考える>2

##### ⑨その場合、会期・期間について希望があればお答え下さい。

年間通して>3, 年4回>1, 年2回>3, 年1回>1

#### Ⅲ；他の分野に比べて木工に関する講習会(セミナー)はとて少ないと思います、

このことについて一緒にお考えいただけるならばご記入下さい。

##### ①需要(参加希望者)は...？

多いと思う>4, ある程度集まるだろう>5  
とても多い/少ないと思う/限られた人だけ>0

##### ②参加者の年代は...？

30代～40代>1, 40代～50代>1, 年代に関係ない>7

##### ③講習の形態・内容はどの様なものが良いでしょう？ 複数回答可

- ・テーマ(制作物)があらかじめ決めてあるもの>1(受講者のレベルによる)
- ・技術的な段階を設定しているもの >4
- ・参加者が自由に制作物を決められるもの >9
- ・講義や加工技術の講習を主とするもの >5

##### ④講座が少ないのはなぜだと考えられますか？

- ・出来上がったものが大きいので、気後れするのでは？。
- ・自分で家具を作れると思っていない。作る楽しさの宣伝不足。
- ・場所と道具、設備と指導者が揃っていればチャレンジしたい人はいる。
- ・環境が整っていない。
- ・道具も多く必要で、危険も伴う、すぐに作品作りには入れない。
- ・時間をかけて講座を進める必要があるため主催者側がいやがると思う。

図4. アンケート結果；問Ⅱ、Ⅲ

る。また職業柄、家具や工芸品に関して強い関心を持っており、そのことはものづくりに関係した講習会等へ数多く参加していることにも現れている（図3；問Ⅰ-④⑤⑥）。従ってレベルという表現は難しいが「もの」に対する情報や感覚についていわゆる目の肥えた集団である。制作しようとする作品や、修得を望む加工と仕上げ方法などからも規制の量産品にはない手仕事の形態や質感に対する強い思い入れが感じられた。

次に講習会等へ費やす時間について問Ⅰ-⑦で質問したが、参加する講座ごとに単位時間が異なるため正確な時間は出せない。しかし月に3～4日以上と回答した人が6/9（名）であることからすると、週に1～2日のペースで何らかの講座に参加していることになる。また問Ⅰ-④⑤⑥と総合しその講座数から考えると、ほぼ年間を通した生活パターンの一部として学習活動が位置づけられていることが分かる。受講費用に対する感覚を聞き取りも合わせて尋ねたが、講座の内容と資格等の目的によって大きく異なるとの回答であった。あくまで一般的な単発の講座であれば2万円までであろうという意見が占めた。

次に問Ⅰ-⑩で今後の希望について質問したが、やはり圧倒的にものづくりに関する希望が強い。ただし次回のこの講座に対する希望と捉えた回答も多く「金具づくり」に集中した。これは私が独自に制作している作品を一足飛びに要求しているもので、前章で述べた誤解の部分であり今後の対応に苦慮している部分である。

## 2) 木工セミナー（講座）に対しての意見

今回の講座は受講者、指導者お互いのケーススタディとして行ったが、その反省と次回の開講方法や内容を探るために問Ⅱ・Ⅲ（図4）の質問をした。

まず問Ⅱ-①②③の木工に関する経験は1年～5年、作品3点～20点と差はあるものの予想以上の経験を持っている。しかし制作に入ってみると実際には断片的な知識と経験でしかないことが分かった。趣味として独学で経験を積んだ参加者が含まればこの傾向はさらに助長されると想像できる。

この指導の結果を問Ⅱ-④～⑦において期待と達成度について質問し検証を行った。演習時や作業中に「今まで知らないまま使っていた」「この道具でこんなこともできるのか」という感想が漏れる場面が多くあった。指導する側としては複数の技術的な

段階要素を往復しながら繋ぎ合わせることが要求され繁雑を極めたが、問Ⅱ-⑤⑥を見る限りその成果はあったと判断できる。

そして問Ⅲでは今回のような講座を公開講座等で開催した場合の需要や内容について質問した。彼らはものづくり講座の類に多く参加しているため、それらへ参加する人達の動向を良く知っている。意見をまとめると、40歳代を中心にして幅広い年代で需要があり、内容的には「自由にものが作れること」「段階的な技術習得ができること」といった矛盾をはらむ推察がなされ、前述の二重構造がここにも見られる。しかしそこには制作物のみならず、主体的な制作行為から得られた知識や技術が「知恵や工夫として生活全般に役立つ」との期待も込められていると思う。

最後に問Ⅲ-④で木工講座が少ない理由を講座開設者の立場になって考えて頂いた。施設管理側に対して理解ある意見を頂いたが、そこから逆説的にある視点に気付いた。「設備が整っていないと木工はできない」という意識が彼らの意見の前提としてある。これは私自身も反省すべき点だが、設備を備えた環境にあってはそれを使用することを前提に教育内容を考え、他の環境で製作する場合への配慮が不足しがちである。また「自分で家具など作れない」と思っている人が多い」という意見もあった。

無論、何も道具無しにできることではないが、本来木工はゆっくり時間をかければ手道具のみでできる制作活動である。前述したように便利な電動工具類や素材も手軽に購入できる環境になりつつある。大きな設備が整った環境でなければできない木工ではなく、一個人が家庭で楽しめる木工を提案することも必要であり、その方が無理なく継続的な学習につながるであろう。（この講座内容に加工機械の設備は必要ないという意味ではない。）

少人数のアンケートとは言え多くの情報と考察すべき要素を得ることができた。次の章では大学における社会人教育のあり方を考察し、具体的な木工講座の案を提案したい。

## V. 社会人向け講座の提案

### 1) 大学における社会人教育について

まず対象者についてであるが、社会人の教育サービスに対するニーズはリカレント教育とライフワーク教育の二つに大別されて語られると思うが、ここで取り上げてきたのは後者に他ならない。

大学入学情報図書館の安井美鈴による調査<sup>※5</sup>では社会人が大学へ入学する目的・動機について3タイプをまとめている。第一が「資格取得」で最も多いが、第二は「教養を深めたい」「体系的・理論的に研究したい」という教養タイプ、そして第三の「人生の新しい方向・可能性を探る」「社会体験を体系化・理論化したい」といった自らの人生を考えようとする新たなタイプがあり、特に第三のタイプが近年増加傾向にあるという。

また関西学院大学において1992年度より社会人向けのオープン・カレッジ・コースが設置されている。これは科目等履修生と聴講生の中間的な制度で、指定科目（既存の授業）内より自らの研究課題に沿って20単位を取得するものである。出願資格は高等学校卒業及びそれと同等以上の資格となっており、受講生の最終学歴による分類では短大以上卒業者は約54%、残り約46%を高校卒業者が占めている（1998までの総計）<sup>※6</sup>。

一方岡山大学では一部で社会人特別選抜、科目等履修生、聴講生の受け入れを行っているが社会人のライフワーク教育は未開発な分野と言わざるを得ない。特に教育学部においては教員養成のみに目標を絞った科目等履修しか認めていない。いずれも資格や学位取得に関わる履修が基本であるため基礎資格として短期大学卒業かそれに同等の資格以上が必要である。従って社会人にとって最も手近な受講方法は公開講座への参加に絞られる。しかし単発の講座や数回の受講形態では上記の目的は達成されないことは明らかである。公開講座にもコース設定をし、体系的なカリキュラムが用意されるべきであるが教官の負担増も避けねばならず単純な拡大は難しい。

文部省生涯学習審議会による答申（1996/4）では公開講座の拡充を求めると共にその方策例として授業科目を公開講座として位置づけることを挙げている<sup>※7</sup>。これは体系的学習と継続的支援を可能とする良案と考えられる。休日に講座を持つ必要もなく、講義形式の聴講であれば負担は少ないであろう。また各専門ゼミへの社会人参加は我々にとっても良い刺激になると予想できる。特に生涯教育コースの授業においては学生による社会人の指導も考えられ、より実践的な指導者養成につながるのではないかと。

ただし単位時間や演習等の人数的制約、開講時間帯における需要など問題や不明な点も確かにあり、段階的な実践と検証は欠かせないであろう。

次に全学的あるいは学部で取り組みを行う場合の

可能性を示しておきたい。

- a) 科目等履修生制度を最大限利用した新たな枠組みを作る。
- b) 公開講座のカリキュラムを普通授業の中で行い、単位取得が必要であれば科目等履修生として登録する。
- c) 学内に生涯学習／教育研究センターを設ける。
- d) 上記公開講座修了者を対象に何らかの制限を設けた（仮称）社会人研究生のような枠組みを設定する。

（d）の社会人研究生については授業外での継続的な学習援助を想定したもので、可能性は未研究である。これ以外は先に触れた生涯学習審議会の答申で挙げられていることであり実現の可能性は高いと思われる。特に教育学部が大学内で生涯教育研究センター等の役割を担って行くことは相応しい姿ではないかと思う、これも提案として加えておきたい。

今年11月の文部省大学審議会答申<sup>※8</sup>においても生涯教育の拡充をグローバル化も含めて求められており、今後早期に取り組むべき課題であることは間違いない。

## 2) 木工講座について

前述の社会人教育体制の可能性に対し半歩踏み出したかたちで、具体性を持った講座計画を提案したいと思う。すなわち実現性の高い私の開講分「木工講座」のみの計画を立てた。まず、設定条件と講座内容について以下に整理する。

### ○講座の設定について

- a) 基本的に公開講座として行い、地域の社会教育機関すなわち岡山県生涯学習センターの岡山県生涯教育大学・連携講座（単位）として登録する。
- b) 入門→応用→課題研究の段階制を設定。入門講座は休日等を利用した短期設定。応用講座は休日等と授業参加の選択受講ができる。課題研究講座は授業への参加のみとし、随時受け付け可能、受付から1年間の受講とする。
- c) 複数科目による体系的コース設定が望ましいが、今回先送りとする。

### ○講座の内容について

- a) 作品制作のみに終始しない学習内容とする。
- b) 応用講座までは手加工と電動工具による加工を主とし、加工機械の使用は最小限とする。
- c) 入手しやすい素材を使用し、発展性を考慮した題材提案を行う。



- d) 題材に自由度を持たせ、選択あるいはデザインの余地を残す。  
 e) 材料や工具類の自費購入を勧める。  
 f) 作品展を行う。

これらの設定のもと、次に木工講座の提案(表2)を行ってみた。現在の私の授業は総合教育課程生涯教育コースのカリキュラム上にあるため、講座の相当授業科目を履修している学生に補助あるいは部分的な指導を任せれば、お互いに実りがあると考えた。

また生涯学習の定義からして様々な受講パターンが用意されるべきであり、応用講座以上は授業の読替えで行う。特に課題研究講座は授業への参加のみで行う講座であり年間を通じていつからでも受講可能としたが、その該当授業(木材工芸課題研究)は通年であるため支障はない。

受講料は半期 15 コマを単純に 30 時間として講習料 10、500 円、年間 30 コマを 60 時間として講習料 16、500 円であり、単独講座の受講であれば受講者の負担は軽い。これらの開講による私の負担は長期休業中に 27 時間又は最小 9 時間であり、現

在でも同様のことを行っているためさほど負担には感じない、むしろ責任と受け止めている。

内容的には応用講座までは手加工を主とした題材とし、家庭でも作業可能なように設定した。受講後に“いつでも、どこでも”次の作品を作れることが大切であり、幾つか発展案の提案も必要であろう。

逆に「加工機械を使えるからこそ大学へ行く」という希望も確かにあるが、課題研究講座以上を望まない限り継続的な学習として良い方向とは思えない。応用講座では木取り作業における安全な加工機械の操作までを経験し、課題研究講座において希望者には応用操作まで指導する設定である。しかし危険を伴う使用が予想できると同時に、設備・備品の管理上支障をきたすと考えられるため、基本的には断片的な援助にとどめるべきである。むしろ個人的な工房の整備を促し、これを援助する方向が相応しい。さらに専門的研究を希望する場合は既存の社会人入学手段が用意されているのである。

これら講座の実施上の問題は受け入れの絶対人数が少ないこと、また個人の研究費のみで支えるには

表2. 社会人向け木工講座の題材及び学習内容の提案

講座	目標項目と内容	時間
入門講座	<b>木を知る・道具を知る</b> ・木材の基本的性質を学習 ・図芸プランターを基本にした制作演習(基本形を元に複数のパターンを提示し選択) > 素 材 ; 屋根板(建築用材)等、板幅150~180mm×板厚15~18mm、及び寸角材 > 切断加工; 両刃鋸、替え刃式鋸、ジグソー、糸鋸、補助治具及びクランプの使用 > 表面仕上; 鉋、サンドペーパー、サンダーの使用法と実習 > 接合方法; 釘打ち又はビス(スクリュー)締め、接着剤併用、ドライバドリルの使用方法 > 塗装方法; 塗料の基礎知識を学習の後、着色方法と屋内/外の使い分け、刷毛の使用 ※ 講座の相当授業科目=木材工芸演習	3h ×3日 又は 6h×1日 3h×1日 定員 15名
中級講座	<b>私の家具を作る</b> A(椅子)・B(本箱)の2コース選択、各18時間 Aコース: 無垢材を使用したベザンチェア(三脚、背付き)製作、装飾部自由 > 素 材 ; タモ、W.アッシュ、ナラ等、座・脚部は板厚28~34mm、背部は板厚18~24mm > 木 取 り ; 帯鋸と手押し鉋盤による木取り作業、横切断は主にジグソーを使用 > 矧ぎ合わせ; ビスケットジョインター、はたがねを使用 > 座部の加工; クリコ又は板ギリによる傾斜穴あけ、ドリルとジグソーによるホリ穴あけ > 脚部の加工; 鉋による面取り、鑿・小刀による丸ホリ(クサビ併用)加工 > 表面仕上げ; 鉋、反り台鉋、及び装飾部は彫刻刀、小刀 > 接 合 方 法 ; ホリ組、クサビ併用 > 塗装方法; (希望者は着色後)オイル、ワックス仕上げ Bコース: 集成材を使用した本箱又は飾り棚製作 > 電動丸鋸及びジグソーによる切断と、ビス(スクリュー)及びビスケットによる接合 ~以下 詳細省略 ※ 講座の相当授業科目=木材工芸応用	授業 ×12日 又は 6h ×3日 定員 各10名
応用講座 1年	<b>自由課題</b> 小箱から犬小屋、家具、ウッドデッキまで家庭で使用する木工品すべて > 中級講座までに使用した工具類で作製可能な木工品を各自が自由に取り上げ制作する > 希望者には加工機械の基本的な使用方法も指導するが制限を付ける。 > 素材は基本的に持ち込みとし、作業は自宅、教室どちらで行っても良い。 > 随時、FAXやメール等を利用して相談しながら制作を進める。 > 基本的に授業時間を講座に当てる。 ※講座の相当授業科目 = 木材工芸課題研究(通年)	年間 通じて 授業へ 自由参加 定員 5名

問題があることが挙げられる。人数については演習／実習の安全管理と用具・備品上の制約があり限界の数字である。また備品・消耗品の整備・管理に対し研究費のみでは本務の運営に支障をきたすことが考えられる。必然的に公開講座経費の配当方法について検討が必要である。

来年度、上記の応用講座に近いものを公開講座(休業期間を使用)で実施する予定である。この案(表2)が実施可能、すなわち公開講座を授業内で行うことが可能となれば、来年度の実践をふまえて再来年度からの開始を目指したいと思っている。

## VI. おわりに

幅広い年齢層への対応と導入的内容は各社会教育施設がすでにその役割を果たしているが、大学がその専門性を生かして参画していく余地は大きい。これをビジネスとして受け止め、様々な可能性を語る時期にある。法人化を控えた国立大学、特に教育学部にとっては存続に関わる転換策の提案と捉えて頂いて良い。学校教員養成のみで学部を支え続けることは困難であると、誰もが感じているはずである。全教科を網羅した教育体制を活用し、体系的な社会人教育の口火を切ってはいかがだろうか。

### 注及び引用

- 1) 宮地功：生涯学習に関する岡山県民の意識調査の分析,電子情報通信学会技術 研究報告,ET,教育工学,Vol.98.Num.183,pp.1-8,1998.7
- 2) 倉敷木材株式会社 主催,クラク「木楽工房」
- 3) 岡山県立高等技術専門校(瀬戸・倉敷・津山)や岡山県立高梁工業高等学校など。

- 4) 村田 治編：生涯学習時代における大学の戦略,高坂健次著,第一章,p22-23,1999,3
- 5) 大学入学情報図書館 RENA「開かれた大学の入学に関するアンケート調査」,1998
- 6) 生涯学習時代における大学の戦略,第5章(村田 治、高坂健次共著),p91-92
- 7) 文部省生涯学習審議会(答申):地域における生涯学習機会の充実方策について,(I)社会に開かれた高等教育機関,1996.4.24
- 8) 文部省大学審議会(答申):グローバル化時代に求められる高等教育のあり方について,2000.11

### 参考文献

- ・上杉孝實：市町村の生涯学習推進計画と地域社会教育施設、日本教育社会学会大会 発表論文集,Vo 1.Num.50,pp20-21,1998.10
- ・林健生：生涯学習施設をつくる,青弓社,1997.5
- ・文部法令研究会：文部法令要覧,(株)ぎょうせい,2000,1,14
- ・文部省生涯学習審議会(答申):社会の変化に対応した今後の社会教育行政のあり方について ,1998.9
- ・文部省中央教育審議会(答申):今後の地方教育行政のあり方について,1998.9
- ・村田 治編：生涯学習時代における大学の戦略,ナカニシヤ出版,1999.3
- ・山本恒夫,浅井経子,手打明敏,伊藤俊夫：生涯学習の設計,実務教育出版,1995.4

(平成12年12月18日原稿受理)

Title: About the lifelong education at the university : Through the practice of "woodwork seminar"

Kazufumi YAMAMOTO (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract: The system of the lifelong education is in the middle of the development. It was examined about the thing-making education of that. The opportunity of learning is rare in the woodwork field in the lifelong education. There is a problem in both those facilities and the contents as well. This year, I held a woodwork seminar targeting the general member of society. This seminar was verified about the learner's construction and the consciousness as an example. Then, the thing which should be necessary them was examined. Continuous systematic support is necessary for them. And, a theme must be planned based on it. The conscious problem of the learner who looks for only a result became clear, too. I examined about the method of the lifelong education at the university. The Ministry of Education life learning council is asking that expansion, and it is effective in it to hold an open class in the class subject. I proposed the concrete plan of the woodwork lecture by the setup which it made use of this for.

Key Words: lifelong education, woodwork lecture, open class